令和元年度　姉妹校等留学プログラム

●学校・団体名/研修名（派遣高校生数）

横浜サイエンスフロンティア高等学校/バンクーバー姉妹校交流（２名）

●渡航先

国/都市：カナダ/バンクーバー市

外国の高校：デイビッド・トンプソン・セカンダリー・スクール

●渡航期間

2019 年９月 17 日～2019 年９月 24 日

Ｉ・Ａさん

バンクーバー姉妹校交流についての所感「自立性」

私はこの交流を通じて、日本とカナダの根本的な考え方の違いについて様々なことを学んだ。

第一に、自分の考えを持つことの重要さについての差を感じた。カナダだけでなくその他諸外国に共通することかもしれないが、中高校生ほどの年代にもなれば様々な話題に対して、自分の考えをしつかりと持っている。むしろそうでないと話にならない。政治や外交などについて一伺うと、十の返答とそのテーマに対しての自分自身の考えが必ず返ってきた。それゆえ、ほとんどの学生がしたいことをするために大学へ行く。国や家庭、そして学生本人が大学にお金をかける価値も感じやすいであろう。一方、日本には自分の考えを主張すれば白い目で見られる傾向さえある。日本を批判するわけではないが、発展に必要不可欠な諸研究における好奇心や探求心を育てるにおいて、決して良くはない風潮である。当学校でもこのことは痛感している。

私はそのような自立性がどのようにして育まれるのかを帰国後数人と議論し、「日頃から意見を交わす習慣」が重要だという結論に至った。そしてそこで重要なのは個人の「意見」を評価することであり、たとえ相手が反対意見を持っていようと、決して相手の人格は否定しないということである。それぞれが日頃から友人や家族、先生などと建設的な議論を交わし、そのどんな意見もフラットな目線で捉えられる、かなりの柔軟さを持っている。それは一見簡単に得られるように見えて、急に持とうとしても難しい。幼少期から育まれているからこその賜物である。自立性のほとんどが幼少期から思春期にかけて形成されることは もはや自明だ。

この自立性が最も露になっていたのは部活・クラブ活動であろう。単なるその多様性や特別さではなく、惰性で団体に所属している学生が一人もいなかったことに驚いた。私は今回、主にコンポストを扱う "Green Team"からプレゼンを受けることができた。普通に過ごしていれば授業でやんわり教わるかどうかほどの知識を、彼女ら全員がしつか

りと頭に入れ、全員が稜極的に説明してくれた。その姿は自立そのものであった。私は今数学物理部という部活に所属しており、その名前から少し引かれてしまうことも多く、あまり胸を張ることが出来ずにいたが、これをきっかけにやはり自分の意志が足りないことを思い知らされた。自分の意志と誇りを持って活動していれば、誰も咎めることはなく、感心してくれる。このことを再認識することができた。

ここまでカナダについて話したが、日本には長所が無いのかというと、そういうわけではない。クラスでの合唱をはじめ、入学式や体育祭、文化祭など団結力が問われるものが日本は得意とされている。では、外国はこれらのことが苦手なのだろうか。私は現地のオーケストラを鑑賞した。圧巻であった。全くもって苦手ではなかった。楽器は合唱と違って自分の世界に入りやすいということもあるかもしれないが、そこには確かに団結力があった。要はクラスという多様な人間が集まっている比較的緩い繋がりの集団で一つのことを行うか、何かが好きという人間が集まってそれを一緒に行うかの違いである。入学式ではなく複数人でパーティーを、体育祭ではなく数十人でコートに会し試合を、合唱コンクールではなくコーラスがオーダトリアムでアカペラを披露する。私はなにもその優劣について話そうとしているわけではない。日本の良さに海外の良さを取り入れることはできないかという提案である。

日本の全てをそれも今すぐに変えてしまうと国民性との乖離が生じ、コスト的にも現実的ではない。ただ、幼稚園保育園、小学校のうちから「自分の意見を持っていい」ということを教えることの１つに加えてみてはどうだろうか。もちろん家庭での普及を促してもよい。外国の子どもたちが議論を交わす様子をビデオで流すなどしてもいいだろう。周りを見て行動することはもう十分教えられてきた。周りと違う意見を持つことで得てしまう人格否定も少しは解消されるのではないだろうか。大学進学時に自分の意志を持つことのハードルも下がる。私のように典型的な自己否定をする人はカナダにはいなかったことが証拠である。外国から考え方を学び、取り入れることがこのような研修の意義だと考える。

Ｈ・Ｍさん

私がこのプログラムに参加して一番に思ったことは、参加して本当によかったということだ。事前学習などを通じて、カナダ やバンクーバーについて知っていることはあったけれど、実際に見聞きし、体験してみると、新しく知ることや思っていたのとは違う気づきがたくさんあり、これは実際にその場所に行ってその場所で生きている人々と交流しなければできない経験だと感じた。また、自分の英語力がいかに不足しているかを知るよいきっかけにもなったと思う。実際に現地の人たちが話す英語は、日本のリスニングテストなどで聞くようなものとは比べものにならず、とても滑らかで、バディが「話し言葉と書き言葉は違う。」と言っていた通り、教科書では馴染みのない言い方もたくさん出てくるので、思ったより聞き取れず初めは苦労した。しかし、一生懸命聞いているうちに少しずつ慣れてきて、周りの反応や雰囲気などもよくみるようにし

ていると、完全には聞き取れなくても、相手の言っていることが何となく伝わってくるようになった。また、一度で聞き取れなくても、話を聞く時には相手の目を見て相槌を打つなどすると、聞き直した時に相手も快く答えてくれるし、聞く気があるというのが伝わってたくさん話してくれたので、聞く姿勢の大切さを改めて学んだ。ホームステイでも、困ることや不安なことはなく、バディもホストマザーも常に気を配ってくれて、食事や洗濯に限らず不安なことはないか聞いてくれたり、英語が聞き取れなかったときもわかりやすいように一生懸命話してくれて、 カナダの人々の人柄の良さをよく知ったように思う。また、それを知ったことによって、自分たちもまたカナダの人に日本人がどういう人柄なのかをイメージさせる模範になっているのだというのを強く感じたし、実際に日本に興味を持っている人に質問される機会が多かった。ホストファミリーに日本語を教えて欲しいと言われ、いただきますやごちそうさまを教えていたときも、向こうの人々にはこれらの言葉に当てはまる言葉がなく、説明するのが大変だったので、海外の人々と交流するときにはまず、自分の文化に詳しくなり、それを人に教えられるようになる必要があると思う。また、私はバンクーバーで 1 週間ホームステイをする中で文化、人々の性格、規則など様々な面で日本とは異なる点にたくさん気がついた。その中で最初に私が興味を持ったのが、バンクーバーの教育システムについてだ。まずカナダは義務教育期間が日本より長く、公立高校にはテストを受けるような受験はない。それを知ったとき私 は､日本では入試があることで一つの学校に通う生徒の学力が近くなっているため、授業のレベルが合わせやすいが、カナダには入試制度がなく、一つの学校に様々なレベルの生徒が通うため､難しい授業をすればついていけない生徒が出て､簡単な授業をすれば物足りなく感じる生徒が出てしまうのではないかと思った｡それについてバディに聞いてみたところ、カナダの多くの学校にはより能力を高めたい生徒のためのminischool や IB(インターナショナル・バカロレア）の授業があり、それらを受けるかどうかを選択できると言っていた。大学 の入り方も日本とは違って、高校の成績が日本よりも重視されているように感じた。また、バディが知り合いで塾に通っている人は一人もいないと言っていた通り、カナダには塾があまりないらしく、代わりに多くの生徒が宿題などを手助けしてくれるチューターのような存在を持っていると言っていた｡これらの点で違いはあるものの、どちらの国も生徒の勉強を最大限手助けする制度が色々取られていることがわかる。また、カナダにも日本の特別支援学校や小・中学校にあった特別支援学級にあたるものはあるそうで、似ている部分もいくつかあった。しかし、カナダの学校は人種だけでなく、いろいろな点で本当に様々な生徒が一つの学校に集まっているとも感じた｡教育制度に限らず、家の造りから食べ物まで様々な部分で日本とは異なる点がたくさんあり、貴重な知識を色々と得ることができたので、今回の経験では異文化に触れることの大切さや面白さに改めて気づくことができたと思う。この全身でバンクーバーに触れることのできた貴重な経験を日本でも生かしていきたいし。また、1 週間お世話になった人々に感謝し、ホストファミリーが日本に来たときには、自分が行った時にどんなことをされて嬉しかったか、安心したかを思い出して行動し、良い時間を過ごせるようにしたい。